

自由民権運動下の雲井龍雄の一側面（上）

『土陽新聞』掲載記事をめぐって

有馬卓也

はじめに

明治六年政変に破れて下野した板垣退助と後藤象二郎は、明治七年一月に愛国公党を設立し、左院に民選議院設立建白書を提出する。が、結局それはいれられず、板垣は帰郷して同年四月土佐に片岡健吉、林有造らと共に民権結社立志社を設立する。その立志社が所謂立志社の獄の後、明治一〇年から翌年にかけて機関誌『海南新誌』『土陽雑誌』『土陽新聞』^①を続けて発行している。その『土陽新聞』（明治一一年発行分）に幕末維新の志士として知られる米沢藩士雲井龍雄^②（一八四四―一八七〇）の小伝及び漢詩が都合五回掲載されている。言うまでもなく、これは民権思想啓蒙の一端としての記事に外ならない。自由民権運動は、理念的部分とはかくとして、表層的には薩長の藩閥専制批判という形を取る。したがって雲井の展開する薩摩批判の詩句は、格好の宣伝資料であったに相違ない。本稿は志士であり、漢詩人であった雲井龍雄が、その死後に展開されてい

く自由民権運動の中で精神的支柱としてどのように型作られていくのか、その一端を捉えようとするものである。

雲井龍雄は幕末明治期において諸藩の志士と交流する中で薩長両藩の専制政治に慷慨し、約二〇〇首の漢詩を残した人物であり、新政府内では土佐藩の後藤象二郎、長州藩の広沢真臣らと交流があった。そして明治三年、芝二本榎の上行寺及び円真寺に帰順部曲点検所を設置して、薩長専制の新政府に不平を抱く士族を糾合していた所を政府から転覆を謀るものとして糾弾され、同年末に死刑を宣せられ梟首となった人物である。

明治一〇年の西南戦争以降本格化していく自由民権運動の中で雲井龍雄の名を目にすることは少なくない。たとえば色川大吉氏の北村透谷に関する諸研究^③が多くそれに言及している外、かなり脚色され事実無根に近い内容ではあるが『雲井龍雄実伝徳川回復嚆^④龍浪』という時事小説が明治一六年に出版され、大衆に雲井の名が知られていったという事実もある。そういう明治一〇年代の経緯の中で、一一年のこの『土陽新聞』の雲井に

関する記事はその初期資料として位置づけられる。そして、この流れの結果の一つとして明治二二年の雲井大赦があると考えられることもできる。加えて、最も古い刊本の雲井詩集は明治一三年発行の浅井晁齋編『雲井龍雄詩文集』であるから、それに先行するものであり、その点に於ける資料的価値もあろう。

本論では『土陽新聞』に掲載されている雲井の小伝及び漢詩を紹介し、その上で自由民権運動下の雲井の位置づけについて管見を述べてみることにしたい。

― 注 ―

- ①『海南新誌』は明治一〇年八月から一二月にかけて一七回発行された知識人向け「大新聞」であり、『土陽雑誌』は『海南新誌』と平行して明治一〇年八月から一二月にかけて一二回発行された大衆向け「小新聞」である。そして両紙が統合されて『土陽新聞』が翌一一年一月から二〇回にわたり発行される。『土陽新聞』の号数は『海南新誌』をうけて一八号から始まる。これら三種の機関誌の成立その他に関しては家永三郎氏が整理された『海南新誌・土陽雑誌・土陽新聞』（昭和五八年、弘隆社）の解説及び解題一・二に詳細に論じてある。参照されたい。尚、『土陽新聞』は明治一一年に発行禁止の処分を受けた後再刊されるが、再刊分は今回の考証からは除外した。
- ②雲井龍雄研究に関しては安藤英男氏のものゝ資料の多さ、考証の緻密さで群を抜いている。本稿に於いても安藤氏のものを使用した。校訂に於て使用したもの以外では以下のものが

ある。参照されたい。

- ・『雲井龍雄詩伝』（昭和四二年、明治書院）
- ・『雲井龍雄研究伝記篇』（昭和四七年、明治書院）
- また筆者も拙稿「雲井龍雄研究序説——慷慨と隠逸をめぐる——」（徳島大学教養部紀要 人文社会二八）に於て雲井詩の特質について論じている。併せて参照されたい。
- ③北村透谷を始めとする自由民権家と雲井龍雄との関係に関しては色川大吉氏の『明治の文化』（昭和四五年、岩波書店）、『新編明治精神史』（昭和四八年、中央公論社）などに詳しい。参照されたい。
- ④明治一六年に東京太平洋堂より『雲井龍雄実伝徳川回復嚆龍浪』（秋亭実著、菊亭静校閲）が出版されている。また時事小説については明治文化研究会編『明治文化全集』第二一卷時事小説篇（昭和三四年、日本評論社）に詳しい。参照されたい。但しこの本には前記の雲井龍雄のものは紹介されていない。

第1章 掲載記事の紹介と検討

『土陽新聞』に掲載されている雲井龍雄関係の記事は次の通りである。

I 第二三号（明治一一年二月五日）

- 雲井龍雄小伝
 - 送釈俊師之京師
 - 退集議院
- 編輯 安岡道太郎

Ⅱ 第二五号（明治十一年二月一五日）

○雨中看海棠有感

編輯 渡辺医

Ⅲ 第二七号（明治十一年二月二五日）

○就縛被護送于東京途中之作

編輯 渡辺医

Ⅳ 第二八号（明治十一年三月五日）

○禁錮中送人行東京

○失題

編輯 渡辺医

Ⅴ 第三五号（明治十一年四月一五日）

○失題

編輯 美濃部周平

編集者が傍点を施している部分もあわせて、以下記事の全文を挙げる。（本号はⅢまで）

尚、雲井詩の記事を紹介するにあたり、論者は簡単な校訂を施した。というのも、『土陽新聞』自体が新聞という字句に対して雑になりがちな出版物であることにより、明らかな誤字がままあるという事、そして雲井自身が自らの詩を複数の者に書き送るという事をしており、真蹟が複数存し、真蹟間にも字句の異同があるという二つの理由による。加えて先に言及したように、『土陽新聞』のこの記事は最も早く刊行された雲井の詩集に先行するものであるという事情もある。

校訂にあたって参照した文献は以下の通りである。注記の際

は繁雑になるのを避けるためアルファベットで表示した。（文字の異同については底本と比して明らかに誤植であり、そのため内容に差異が生じているもののみ原文を訂正した上で原文の文字を注記した。したがって異同があっても内容に大差のない場合は、原文はそのまま示した上で底本の文字を注記した。尚、記事は全て旧字体で表記されているので、記事については旧字体を使用する。）

A 浅埜晃斎『雲井龍雄詩文集』（明治十三年、写本）

B 桜井美成『雲井詩集』（明治二十七年、須佐権平発行）

C 麻績斐・桜井美成『東北偉人雲井龍雄全集』

（明治二十七年、東陽堂）

D 安藤英男『雲井龍雄研究詩篇』（昭和四十七年、明治書院）

E 安藤英男『新稿雲井龍雄全伝』（昭和五十六年、光風社出版）

（このうちBはCが刊行される前に桜井が詩だけを抽出して編集したものだが、BC間にも文字の異同がみられるので、両方とも取り挙げておいた。またDとEは共に安藤氏の考証によるものであるが、ここにも安藤氏の見解により、真蹟間の文字の異同などによる字句の変更などが見られるので、ともに取り挙げておいた。）

Ⅰ 第二三号

○雲井龍雄小傳

雲井龍雄、羽州米澤の人。資性豪邁にして不羈、而れども容貌溫柔にして婦人の如し。嘗て安井軒息の門に遊び、塾長

と爲る。人呼びて今張良と曰ふ。夙に英才を懷き、又騷思饒なり。而して詩は最も古體に長ず。皆雄偉悲壯なり。今其の詩を讀めば以て其の人を想見するに足る。戊辰の亂に、兵を將ゐて王師に抗ふ。後聘に應じて東都に來り官に列するも、幾もなくして其の職を辭す。當時は王政創業の際にして、政務繁劇、百度未だ備はらず。然るに大臣等、遊蕩淫逸し、晨には北里の花を吟じ、夕には二橋の月を嘯きて、以て政を顧みざる者あるに至る。是に於てか、慨然として濟世の志を懷き、竊かに黨與を結び、以て姦を斬らんと謀る。事覺はれ遂に小塚原に梟せらると云ふ。(筆者改行)

余久しく東都に遊ぶ。友人某會て余の爲に之を解すること詳らかなり。蓋し友人某は雲井氏の知人ならん。當時は其の事は非、余之を知るあたはずと雖も、常に爲に其の人を景慕す。一日其の墓を小塚原に弔ふ。時は方に秋、墓は寒烟枯艸の中に在り。百蟲悲鳴し、滴露凝涙して、幽魂を弔ふの状に似たり。余、彷徨すること之を久くして、感慨禁ずるあたはず。熟つら古今を回視するに、慷慨義烈の士、生命を白刃に委ぬること多し。諂諛姦猾の輩は、皆威福を當世に擅にす。若し氏をして時事に感激する所なく、或は卿相の高位に列せしめば、安逸して以て其の天年を終へしならん。未だ知るべからざるなり。然れども事茲に出でず。晉に美祿を受くるあたはざるのみに非ず、貴重の生命を以て、此の尺餘の小墓に換ふ。悲しいかな。然りと雖も、死生を外にして以て功名を博むるは、大丈夫の常なり。其の成るに及びてや、王公の

尊と爲り、相將の貴と爲る。其の敗るるに及びてや、首を青艸白沙に曝し、誣するに賊名を以てす。是に由りて之を觀れば、彼の順と逆とは成敗を以て之を論するに過ぎざるが如し。嗚呼、大丈夫の名を成すに何ぞ必ずしも順逆を論ぜんや。聊か感ずるを書して以て小傳を作る。(原漢文)

・この小伝を讀めば、以下に掲載される彼の漢詩が思想啓蒙の一翼を担うものとして評価されていることがわかる。「友人某」が誰であるかは不明だが、「其の事は非、余之を知るあたはず」としながらも、当時まだ国事犯である雲井の行動を「濟世の志」を抱いて「政を顧みざる」「姦」或は「諂諛姦猾の輩」を斬らんとしたものであるとし、その「順逆」は論ずべきではないと結論づけている。そしてむしろ雲井の「大丈夫」、「慷慨義烈の士」としての精神性を色濃く出し、高く評価している。したがって、当然のごとく以下に掲載される雲井詩も、この路線に沿ったものが選定されていることになる。

○送釋俊師之京師

生當雄圖蓋四海

死當芳聲傳千祀
非有功名遠超群

豈足喚爲眞男兒

俊師膽大而氣豪

釋俊師の京師に之くを送る^①

生きては當に雄圖四海を蓋ふべく
死しては當に芳聲千祀に傳ふべし
功名遠く群を超ゆることあるに非
ずんば^②

豈に喚びて眞の男兒^④と爲すに足ら
んや

俊師 膽は大にして氣は豪

憤世夙入祇林逃

雖有津梁無所布

難奈天下之滔々

惜君奇才抑塞不得逞

枉方其袍圓其頂

何事衣鉢纔潔身

不爲鹽梅調大鼎

天下之溺援可收

人生豈無得志秋

或到虎吞狼食王土割裂

八州之艸任君馬蹄之蹂躪

君今去向東海道

到處山河感多少

古城殘壘趙耶韓

勝敗有跡尚可討

駿之山兮參之水

英雄起處地形好

知君到此氣慨然

應悟大丈夫空不可老

世を憤りて夙に祇林に入りて逃ぐ
津梁ありと雖も布く所なし^⑤

奈ともし難し天下の滔々たるを
惜しむ君が奇才の抑塞して逞する
を得ず

枉げて其の袍を方とし其の頂を圓
くするを

何事ぞ 衣鉢 纔か身を潔くし

鹽梅 大鼎調ふるを爲さざるは

天下の溺れたるは援けて収むべし

人生豈に志を得るの秋なからんや

或は虎吞狼食、王土割裂するに到
らば^①

八州の艸^⑧ 君が馬蹄の蹂躪^⑨に任せ
ん

君 今 去りて向ふ東海道
到處の山河 感 多少

古城殘壘は趙か韓か

勝敗跡あり 尚ほ討めべし^⑫

駿の山 參の水^⑬

英雄の起る處は地形好し

知る 君此に到りて氣は慨然^⑭

應に悟るべし 大丈夫は空しく老

ゆべからざるを^⑪

〔校訂〕

①詩題をA Eは「送釋俊師」に作り、Bは「示俊師」に作り、C Dは「釋大俊、發憤時事、慨然有濟度之志。將歸省其親於尾州。賦之以贈焉。」に作る。安藤氏はDに於て本詩の真蹟は「少なくとも二種ある」と指摘し、字句に異同はないが詩題は「送釋大舜」と「送大舜」であると注記している。

②原文は「還」に作るがA B C D Eに従つて「遠」に改めた。

③「非有功名遠超群」をA Bは「功名非有遠超群」に作る。

④A B C D Eすべて「兒」を「子」に作る。

⑤「無所布」をAは「敷無處」に作り、C D Eは「無處布」に作る。

⑥A B C D Eすべて「纔」を「僅」に作る。

⑦A B C D Eすべて「到」を「至」に作る。

⑧A B C D Eすべて「艸」を「草」に作る。

⑨A B C D Eすべて「蹂躪」を「踐蹂」に作る。

⑩「跡」をA Bは「迹」に作る。

⑪A B C D Eすべて「尚」を「猶」に作る。

⑫「討」をCは「訪」に作る。

⑬「駿之山兮參之水」をCは「參之水兮駿之山」に作る。

D Eは「參之水 駿之山」に作る。

⑭「起處」をAは「所起」に作る。

⑮「到」をCDEは「至」に作る。

⑯ABCDEすべて「應」を「當」に作る。

⑰ABCDEすべて「空不可老」を「不可空老」に作る。

・明治三年二月中旬の作である。同じ時期に長州に於て戊辰戦争の論功行賞への不満に端を発する脱隊騒動が起こっている。そして、その暴動は九州へも飛火し、一時騒然となった時期である。（『土陽新聞』二六号には、この脱隊騒動に参加し、翌年には日田で農民一揆を指導した大楽源太郎の「獄中読頼三樹之詩有感」という詩が掲載されている。雲井は斗南藩士原直鉄らとともに芝一本榎に於て決起の謀り事を練っていた。その折、盟友釋大俊も雲井に賛同し、地元尾張での決起を主導すべく出發する。その際、雲井が大俊師に贈ったものである。冒頭に。点を施して、真の男子は雄莊な計画を抱いて、その功名を千歳に伝えねばならないとする気概を強調し、末尾、点部の「大丈夫は空しく老ゆべからず」がそれを受けている。また中ほどの、点部「天下の溺れたるは援けて収むべし、人生豈に志を得るの秋なからんや」の二句は、民権運動のスローガンとしても通用するものであり、最初に掲載する詩としての価値はこの上もないものであろう。

○退集議院

天門之窄窄於甕。
不容射鉤一管仲。
嶢嶢無恙舊驕驕。

集議院を退く

天門の窄きは甕よりも窄し
容れず 射鉤の一管仲
嶢嶢^② 恙なし 舊驕驕^③

生還江湖眞一夢
自咲豪氣猶未摧
每經一難一倍來
眸視蜻蛉洲首尾
欲向何處試吾才

講學平生護此志
道窮命乖何足意

只須痛飲強自寬

埋首之山到處翠

〔校訂〕

①原文は「衆議院」に作るが「集議院」に改めた。詩題をAは「失題」に作り、Bは「題障壁」に作り、CDEは「題集議院障壁」に作る。

②「嶢嶢」をAは「嶢嶢」に作る。

③原文は「鱗鱗」に作るがAに從つて「驕驕」に改めた。BCは「驕驕」に作り、Dは「驕驕」に作る。

④「還」をABは「歸」に作る。

⑤「咲」をCEは「笑」に作る。

⑥「眸視」をBCDEは「睥睨」に作る。

⑦「欲向何處試吾才」をAは「向何處欲試我才」に作り、CDEは「將向何處試我才」に作る。

生きて江湖に還る^④ 眞に一夢
自ら咲ふ^⑤ 豪氣猶は未だ摧けず
一難を経る毎に一倍し来る
睥視^⑥ 蜻蛉洲の首尾
何れの處に向つて吾が才を試さんと欲する^⑦

講學^⑧ 平生 此の志を護る^⑨

道窮まり命乖くも何ぞ意とするに足らん

只だ須らく痛飲して強ひて自ら寬すべし^⑩

首を埋むるの山は 到處處翠なり

⑧「講學」をAは「講学」に作る。（学は學の俗字）BCDEは「溝壑」に作る。「溝壑」は「孟子」滕文公下の「志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず」を典故としている。

⑨「護」をBCDEは「決」に作る。⑧と併せて考えると、「土陽雜誌」とAの二つだけは、この句に異なった意味を付与している。すなわち「土陽新聞」とAは「私は常学問を重ねることを大事としてきた」という意味になり、BCDEは「私は志士である以上、常々溝壑に死ぬ覚悟はできている」という意味になる。ただし前者の意では前後関係にいささか無理が生じる。

⑩「意」をABCは「怪」に作り、DEは「異」に作る。

⑪「只」をCDEは「唯」に作る。

⑫ABCDEすべて「強」を「醉」に作る。

・雲井龍雄は明治二年九月に集議院寄宿生となったが、翌一月には退朝させられる。（東京米沢藩邸が記していた『東京御帳』によると正式には翌三年一月二八日に退院となる。）「退集議院」はその当時に詠まれたものであり、所謂公議であるはずの議院に於てかつて戊辰戦争に参加した者として退朝を迫る新政府の看板と実情の矛盾に憤ったものである。

冒頭。点部は『史記』齊太公世家を典故とする部分であり、齊の桓公は自らに矢を射た管仲を宰相として登用したというものである。雲井はその故事を引いて、自分を追い出した集議院の懷の狭さへの憤りを表現している。ここに集議院を離れて野

に降った雲井と、明治六年政変に於て征韓論に破れ、下野した板垣、後藤とが同質のものとなり、現政府の実情を知らせる資料として格好の材料となる。そして、点部の「豪氣未だ摧けず、一難を経る毎に一倍し来る」の語が、民権運動家らの氣概を示すものとしてそのまま転用し得るものとなっている。

Ⅱ第二五号

○雨中看海棠有感

綠濕紅沈悄無力。

恰是楊妃啼後色。

花容如愁何所愁。

我向花間花黙々、

想昔濱殿々南莊、

把酒賦詩賞海棠、

當時同盟今四散、

或爲魯連或張良、

不以水火挫其志、

往々激昂就死地、

死者函首送賊庭、

生者海島尚唱義、

嗟我赤城僅脱身、

再舉無策久逡巡

雨中 海棠を看て感あり^①

綠は濕ひ紅は沈んで、^② 悄として力^③

なし

恰も是れ楊妃啼後の色^④

花容 愁ふるが如きは何の愁ふる^⑤

所ぞ

我向^⑥花に向ひて問ふも 花 黙々^⑦

想ふ^⑧ 昔 濱殿々南の莊

酒を把り詩を賦して海棠を賞す

當時の同盟 今 四散^⑨

或は魯連と爲り、^⑩ 或は張良

水火を以て其の志を挫かず^⑪

往々激昂して死地に就く^⑫

死者は首を函にして賊庭に送られ^⑬

生者は海島に尚ほ義を唱ふ^⑭

嗟 我^⑮ 赤城僅かに身を脱し^⑯

再舉 策なく久しく逡巡す^⑰

今對此花想往事
愁淚和雨紅沾巾。

今 此の花に對して往事を想へば¹⁷⁾
愁淚¹⁸⁾ 雨に和して 紅巾を沾す¹⁹⁾

○秋津天樂云ふ、悲壯灑洒にして、筆底に血淚を含む、と。

(原漢文)

〔校訂〕

①詩題をAは「己巳三月雨中觀海棠有感作」に作り、Bは「雨中覽海棠有感」に作り、Cは「雨中觀海棠」に作り、DEは「雨中觀海棠有感」に作る。

②「綠濕紅沈」をBCは「嬌紅欲滴」に作る。

③原文は「情」に作るがABCDEに従つて「情」に改めた。

④「是」をCDEは「似」に作る。

⑤「啼」をBCは「浴」に作る。

⑥「我」をCは「吾」に作る。

⑦「向」をCDEは「對」に作る。

⑧「想」をDEは「憶」に作る。

⑨「爲」をEは「成」に作る。

⑩「不以水火挫其志」をABは「須水火不碎其志」に作り、CDEは「不將水火挫其志」に作る。

⑪「激昂」をCDEは「暴憑」に作る。

⑫「賊庭」をABは「王廷」に作る。特にAの「王廷」は時勢を考えた上での作爲的なものと思われ、「土陽新聞」が「賊庭」のままで掲載しているのは、かなり大胆なものと考えられる。

⑬「島」をBは「嶋」に作る。

⑭「尚」をABCDEは「猶」に作る。

⑮「我」をCDEは「吾」に作る。

⑯「僅」をABは「纔」に作る。

⑰「想」をCDEは「思」に作る。

⑱「愁」をBCDEは「血」に作る。

⑲「沾」をCDEは「濕」に作る。

・明治二年春の作とされている。八句目に張良の名が見えるが、『史記』留侯世家が示す通り、張良は秦始皇の狙撃に失敗し、一時下邳に潜伏し、力をためて再起を期していたことがある。雲井は張良を退く勇氣を持った智將、潜伏者などのイメージで捉え、しばしば詩中にその名を登場させる。この「雨中看海棠有感」も、前年の戊辰戦争に於ける敗北からしばらくたち、雲井自身が再起を期しつつも、しばらくは潜伏しようとしていた頃の作である。したがって、秋津天樂の言う「筆底に血淚を含む」は、戊辰戦争で死んでいった仲間たちへの、また「策なく久しく俊巡する」自らへの血淚である。これも下野を強いられた板垣らのイメージをダブらせているものであろう。

Ⅲ第二七号

○就縛被護送于東京途中之作

縛に就きて東京へ護送せらるる途中の作^{①)}
欲廻狂瀾濟一世、
狂瀾を廻して一世を濟はんと欲し^{②)}

道、の窮通未肯計、
直氣吐來震九重
滿眼神腕是芥蒂
天日不照孤臣心
枉被浮雲遮且蔽
欲死則死生則生

我肘豈容易使人掣

檻車夕過東寧川
目擊湖山淚沾袂
回思遭逢夢耶眞
壯圖唯有水東逝
嗚呼縱令此山如礪此河如帶

區々之志安能替

○凌雲曰く、豪強不屈の氣、字々に溢る。千歳の下、怯夫をして起たしめん、と。(原漢文)

○暮洲曰く、大丈夫の志を持つことの固きこと、當に此の如くなるべし、と。(原漢文)

〔校訂〕

①詩題をAは「檻車過刀水慨然有作」に作り、Bは「庚午夏有召檻致龍雄於米澤途中過東寧河慨然有作」に作り、

道の窮通 未だ肯て計らず

直氣 吐き來りて九重を震はし

滿眼の神腕^③ 是れ芥蒂^④

天日照さず 孤臣の心

枉げて浮雲に遮り且つ蔽はる

死せんと欲せば則ち死し 生きんとすれば則ち生く

⑤ 原文は「湛」に作るがABCDEに從つて「遮」に改めた。

我が肘は豈に容易に人をして掣せしめんや

檻車 夕に東寧の川を過ぐ

湖山を目撃して 涙 袂を沾す

回思すれば 遭逢 夢か眞か

壯圖 唯だ水の東に逝くあり

嗚呼縱令此の山は礪の如く 此の河は帶の如くとも

區々の志 安くんぞ能く替れんや

⑥ 「易」字をBCDEは欠く。

⑦ 「川」をBCは「河」に作る。

⑧ 「沾」をCは「濕」に作る。

⑨ 「思」をABは「首」に作り、CDEは「願」に作る。

⑩ 「唯」をBは「只」に作る。

⑪ 「河」をAは「川」に作る。

CDEは「北下途上」に作る。

② ABCDEすべて「廻」を「回」に作る。

③ 「腕」をACは「蔽」に作り、BDEは「絞」に作る。

④ 「蒂」をCDEは「帶」に作る。

⑤ 原文は「湛」に作るがABCDEに從つて「遮」に改めた。

⑥ 「易」字をBCDEは欠く。

⑦ 「川」をBCは「河」に作る。

⑧ 「沾」をCは「濕」に作る。

⑨ 「思」をABは「首」に作り、CDEは「願」に作る。

⑩ 「唯」をBは「只」に作る。

⑪ 「河」をAは「川」に作る。

・明治三年八月、雲井は太政官の命によって、幽閉中の米沢から東京へ檻送される。同年初めに帰曲部局点検所を芝二本榎の上行・円真の両寺に設け、不平士族を集合させたことに對する政府の弾圧である。末尾部の凌雲・暮洲のコメントに「豪強不屈の氣」「怯夫をして起たしめん」、「大丈夫の志を持つ」などとあり、第三号に記されていた小伝と同質の評価がなされている。ただし小伝と異なり、雲井詩に對する直接のコメントに於て、とりわけ彼が米沢から東京へ檻送される時の作に對して、かくの如きコメントを付しているということは、當時としてはこれも大胆なものであったに相違ない。(以下次号)

(ありま・たくや 総合科学部講師)